

2019 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	野口 裕美
研究テーマ	被災地支援としての動物介在療法とロボットセラピーにおける被災者の心ケアの可能性について

<助成研究の要旨>

【目的】

動物介在療法が被災者の心ケアとして不安やストレスの軽減に十分効果を発揮できるのではないかと考え、被災地支援として、生きた動物を介在させる動物介在療法といつも動物の比較対象になる存在で、今後の活躍が期待されているコミュニケーションロボットを介在させるロボットセラピーを実施し、被災者に対する心理的な効果を比較検証した。また、発災後の時間経過の中で変化する心理的な変化の各段階において心理的支援として効果な方法と時期を明らかにするために、発災時期の異なる地域にて調査を実施し、今後の災害時に適切な時期に適切な手段で心の支援ができる様にシステムを構築する。

【方法】

発災後、経過時間の異なる宮城、熊本の地域で動物介在療法とロボットセラピーを実施した。多種、多様なコミュニケーションロボットから対称的な機能を有するものを2種類選択した。1種類は人型ロボットのパルロ、もう1種類は犬型ロボットのアイボとした。

- ・実施場所：仮設住宅、集合住宅における集会場
- ・実施方法：1回の介入時間は調査と活動を含めて1時間（介入前後で各10分の調査を実施）
- ・実施内容：
 - 1) 介入方法： 集団に対して、犬およびロボットの介入
- ・対象：集会場に自由意志で集まる被災者
- ・尺度：不安・ストレスの量的評価
 - ・主観的評価（実施前後）：不安・ストレスを評価尺度を用いて調査（STAI）
 - ・生理学的評価（実施中）：自律神経系の活動を測定する指標として心拍 R-R 間隔を定量化し、自律神経系解析プログラムで解析

【結果・考察】

動物とロボットは、常に比較の対象となり、今回、被災地という環境に生きた動物とロボットを導入し、ストレスと不安の軽減の効果を検証した。熊本では、ロボット（パルロ）12名（年齢 63.8±10.8 才）、ロボット（アイボ）6名（年齢 71.3±17.2 才）、犬4名（年齢 63.8±10.8 才）、宮城ではロボット（パルロ）9名（年齢 69.3±13.0 才）、ロボット（アイボ）5名（年齢 77.4±11.4 才）、犬4名（年齢 73.0±9.2 才）の自由意志で参加する被災者を対象とした。介入時の自発的な参加者数はロボットの介入の開催時の方が熊本、宮城ともに多かった。また、開催の初回での参加が多かった。人型ロボットであるパルロにて熊本、宮城ともに有意差ありでストレス軽減効果が生じていた。また、熊本では日常的な不安の軽減効果あり、宮城では、その場での不安の軽減効果となった。被災後の日数の経過に応じて、不安軽減効果の期待できる要素の違いが示唆された。犬とロボットでは被災者は全く異なる感情を向けていることが分かった。犬には昔の思い出の一部として、また既存の概念の中での存在として捉えており、一方で、ロボットには全く、未知の新しい存在としての受け入れができていた。被災という経験から失われたものを再構築する過程の中では、現状がスタートとなる様な新規性の高い介入の方が過去の経過に捕らわれることなく自然に受け入れができる可能性が示唆された。そして、被災の種類により動物を失う経験を余儀なくされた宮城では、集会所の玄関まで来て帰られる方も数名おり、その傾向がより強かった。両地域ともに初回の参加者数が最も多く、外部の新たな支援ということには興味、関心を高く示される傾向もあることも明らかとなった。また、発災の経過年数のみで横断的に被災者心の解釈はできないことも同時に明らかとなり、現地の災害に種類に応じた介入内容の検討も必要不可欠であることも示唆された。